

「持続可能な地域づくりのために」

皆さん、おはようございます。今日は110人くらいの皆さんがお見えだそうですが、こんなにフレッシュな皆さんの前でお話ができるのを大変光栄に思います。私どもの村の高齢化率は45.5パーセント、高齢化率の意味はわかりますかな。わかるよね。65歳以上の人口がどの位いるかが高齢化率になります。全国では今、23パーセントくらい、長野県は26パーセントくらい。特に飯田・下伊那地域は非常に高齢化率が高くなっています。高齢化率が45.5パーセントということは、65歳以上の人達が二人に一人、非常に高齢化率がある意味で先行しているんですけど、逆に言うところから近い日本の将来、もう間もなく訪れる高齢化社会の超最先端に行くのが、私達の住むこの地域です。それを十分理解していただいて、いろんな仕事に取り組んでいただければと思います。

それではここで座らせていただいてお話ししたいと思います。私は、ご紹介ありましたように長野県下伊那郡根羽村の村長でございます。1957年生まれです。根羽の小中学校を卒業して、高校は飯田市の方。従いまして、根羽の子供達は殆どが下宿生活、アパート生活になります。中学校を卒業すると親元を離れて、殆どが一人暮らしをして大きくなっていく。私もご他聞にもれず飯田市の方にアパート・下宿しまして、高校に通って、それから大学の方に進学して卒業後、縁があつて根羽の役場へ就職いたしました。それが1980年。それから様々な仕事に関わって、2011年、丁度2年前でございますけれど、統一地方選がございまして、根羽村はそれまで20年間非常に長い間、前村長さんがやられておったんですが、健康の理由で勇退され急遽選挙に出まして村長に就任した。そんな経歴でございます。

根羽村は、長野県の一番南の端、長野県、非常に長く大きいわけですし、昨日も県町村会の会議があつて県庁に行ったんですけど、長野県庁に行くには根羽を出て山本のインターから高速に乗って、2時間半から3時間くらいかかります。位置関係をよく考えてみますと、私どもは飯田市から国道153号線が名古屋市まで走っています。

国道153号を走って名古屋市までは1時間半で行きます。私が東京へ出掛けるときは名古屋市へ出て新幹線に乗って東京へ行きますので、それで大体3時間か3時間半あれば十分楽に行きます。従いまして、行政は長野県ですけど、例えば、愛知県庁へは1時間半あれば行きますし、長野県庁は2時間半から3時間で、三重県庁も今、伊勢湾岸道があつたりするので三重県の津市まで行くのに2時間で行きます。同じ3時間の距離というのは大体、京都が3時間ということで、長野県はある意味、長く広いところだということをも十分理解していただくのと、あと川があつて当然わかるように、上流から下流へ流れます。そして流域が長野県には沢山ある。特に皆さん方は南信地域ですので、天竜川水系が殆どだと思いますが、私達の根羽村は愛知県で一番高い山が茶臼山で1,415メ

一トル、それが根羽村にあります。その山を水源として愛知県の水瓶、三河の水瓶になる矢作川全長 118 キロになりますけど、その源流が根羽村で、これから話に出ます安城市さんですとか、そういった流域の連携が古くから熱心に取り組まれております。その辺は後ほどお話をさせていただきたいと思います。

それからもっと歴史的な資源で、すごいことは、元々根羽村は三河の国で愛知県でありました。1571年に武田信玄が三河を攻めていたときに丁度、京へ上るという形で、非常にいろんな戦いがありましたけれど、その時に三河へ攻めて行った際に、根羽村が信州に編入されたという歴史をもった村でありまして、言葉も私達は長野県という言葉よりも三河弁で、「そうだねー」とか「そうだにー」とか、それから風習も殆どが三河の風習になります。こちらでいう小正月じゃなくて旧正月をやったりと、そういうような形で非常に地域によって様々な風習がまだ残っている、そんな地域が飯田・下伊那南信地域だろうと思います。

皆さんは、4月からフレッシュな公務員になったわけですが、今、私達の周りでは非常にいろんな大きな動きが出ております。

特に今日も皆さん、新聞見てこられたかと思えますけれど、長野県知事が県内部の道州制の諮問機関、ワーキングチームを作っているいろんな勉強会を始めたことが載っておりました。皆さん、平成の大合併という言葉は知っていますかな。平成の大合併を知っている人、手を挙げてみてください。ありがとうございます。過去にはいろんな合併がありました。

合併には明治の大合併、それから昭和の大合併、それから平成の大合併。この3つがあります。そういった流れはしっかりと覚えておいて、まず一つ、明治の大合併というのは、明治22年に市町村制が施行されて、概ね一つの規模を300から100個位にまとめようじゃないかということで、明治の大合併が行われました。それから71,000位あった町村が15,800位、約5分の1位に明治の大合併で小さくまとまりました。更に、昭和の大合併、これは昭和28年の町村合併がありまして、昭和36年までの間に合併が繰り返されていったんですが、その時は、ほぼ3分の1まで数が減っています。昭和28年に9,800位あった全国の市町村が約3,470位にまとまり合併された。更に、平成の大合併はもっともっと大変なことが起こっております。これは平成11年に地方分権というのが売りで施行されました。

それに基づいて基礎自治体の規模を大きくして財政を立て直す。そんなような意味合いで始まったんですけれど、いわゆる地方分権が担うことになる基礎自治体を強化するという大前提ですので、それは正しいか正しくないかは、これからしっかり見ていけばいいと思うんですけれど、そういった大前提で合併が進められて、平成24年現在で全国には1,419の市町村があります。うんと大きな合併が進められました。特に788の市、それから747の町、184の村がありまして、その村のうち長野県が

35の村がありますので、長野県は、村が一番全国的にも多い、そんな特色があると思います。また長野県はご承知のように、120市町村あったのが平成の大合併で77の市町村に合併が進んでまいりました。

特に長野県があまり合併が進まなかった背景は、幾つかありまして、長野県の当時の知事で田中康夫知事を知っておられるかな、田中知事が合併は進めない、どちらかといえば合併は反対の知事でありまして、そういった部分もあって長野県は合併が比較的進まなかった地域、もっと他にもできなかった理由はいっぱいあると思いますけれど、そういったことがありました。

その合併に際して今日皆さん、南信から来られた方達、大勢おられるんですけれど、合併を平成で経験した市町村というのは飯田市と阿智村だけだと思います。今日研修に出られておる市町村の皆さんでは、飯田市と阿智だけかなと先ほど名簿を見させていただきましたけれど、そういった状況で、飯田・下伊那地域は飯伊地域と言いますけれど、この平成11年の市町村合併の時に、広域合併の話もございました。それについては、様々な検討をしてきましたけれど、飯田・下伊那地域の面積は1,900平方キロメートル。これは大体大阪府だとか香川県の面積に匹敵します。そこに大体人口が当時で約17万人、平成10年当時ありました。ここをまず、大きな合併をしようじゃないかと研究をしたけれど、ご承知のように中々こういった地域では大きな土地に少ない人数、山あり谷ありで行政効率が悪いというような形で、合併は断念いたしました。もう一つ断念したのは、飯田・下伊那地域は飯伊広域連合という形で自治体が共同して取り組む、単純に明解に言うと、消防業務、ごみ処理業務、そういったものを広域化しておりますけれど、広域行政が非常にうまく機能しているところでありまして、大きな飯田・下伊那地域が一個になる合併は、こういうことで断念した経過があります。それは平成16年であります。その後、平成17年に旧上村、それから旧南信濃村が飯田市に合併しております。更にもう一つ、阿智村がございまして、平成18年に旧浪合村、それから平成22年には旧清内路村が合併して、今の阿智村が誕生しております。また、私ども根羽村でも、合併についていろんな研究を行いました。特に、お隣の愛知県豊田市と合併しようじゃないかというお話もあって、豊田市の方へもお話をしたり、そういった経過もありましたし、村の皆さんで合併について熱心に協議しましたが、先ほども言いましたように非常に私達の周りは、山あり谷あり、そこが単純に合併してみても、そこには中々効率性だとか、私達が本当に求める利便性はないのではないかと、当面は自分達の地域を自分達で頑張って生きていこうというような形で、根羽村は平成16年に「ネバーギブアップ宣言」というのを出しました。根羽村は、根羽村をもじって今の観光施設のネバーランドというのがありますし、ネバーギブアップ宣言、根羽村はネバーギブアップ、決して諦めないぞという意味合いなんですけれど、新聞にもいろいろ出まして、根羽からネバー

ギブアップ宣言というのが大きく出ました。いろんな人から根羽村のネバーギブアップ、だめになったと言っているいろいろ笑われたこともあったけれども、いずれにしましても、そういった形で自分達の存在をしっかりとアピールして生きていこうというのは、根羽村では平成16年に「ネバーギブアップ宣言」として村づくり、村民の皆さん含めて、地域づくりを大きく変えていった経過があります。

また、愛知県、岐阜県とか全国的には非常に大きな合併が繰り返されており、愛知県も88あったのが57の市町村になって、特に岐阜県は99あったのが42になっています。岐阜県は非常に大きな合併をして、特に高山市なんかは10町村が合併しておりまして、旧高山市は本当にあっさりした綺麗な町だったのに、周辺がどんどん合併して2,200平方キロメートルと大きな東京都と同じくらいの面積が高山市になりました。人口は92,000人でありますので人口密度は42人位。1平方キロメートルで東京都は人口1,322万人ありますので、そこで行政効率とか、一つの自治体が管理する面積が、果たしてそれが適正であるのかどうかは、内容はそれぞれで、検討すればいいのですけれど、そういった形の平成の大合併をしっかり検証するべきであると思います。静岡でも同じように74あったのが35。特に今、ニュースでずっと賑わしている地すべり、天竜区、浜松市の天竜あるいは天竜川のすぐ近くにある区ですけれど、浜松市も大きな合併をしました。天竜区はもともと天竜市だったところです。そこで今、地すべりが非常に大きな大問題になっているところですが、その浜松市も大きな合併をして1,600平方キロメートル。非常に大きな都市になっておるといことで、平成の大合併によって行政の経費は非常に削減されたと思います。特に私達みたいな首長ですとか議会議員は、そこでかなり減ってきています。さらに合併したことによって、暫定的に年数をかけて確実に職員数も減少してきます。ただ、そういった行政的には表面上非常に削減されているのですけれど、今言った私達の地域全体の本来あるべき住民のための行政、そういったものが差しのべられているのか、本当にそこに人が住み続けられる仕組みができていくのかしっかり検証していかないといけないと思います。特に大きな合併をした市町におきましては、周辺部が寂れるという現象が起きてきます。何が寂れるかというのは、役場も一つの地域の大きな企業の拠点になりますし、村づくりの拠点になりますが、そこが支所になって例えば50人いた職員が10人に削減される。そうすると、40人は本所の方へ引っ張られていきます。そのことによって大きな合併をすれば本所への通勤が負担になりますので、結局、皆さんはお子さんを連れて一家で町を移って行く。そういった現象が全国でいっぱい起きています。果たしてそれがいいことなのでしょうか、ということで私は疑問を投げかけているところでもあります。悪いとは言っていないけれども、大きな問題です。

更にもう一点、先ほども言いましたように道州制の問題が非常に大きな問題です。是非、皆さんも興味を持って見ていただきたいのですが、自民党では今国会に、同州制の基本法を出す方向で進んでいるようでございます。道州制というのは、単純に言うと国と地方の役割分担を明確にして、国の役割を外交だとか防衛、そういった国家的事業を重点化して、内政については、それぞれ道州と市町村が担うというものです。そういった非常に見てくれはわかりやすい、素晴らしいように感じるんですけど、果たして道州制というのは、私達の今あるような住民に密接な自治体を解体して、更にもっと一つの単位を20万から30万人規模の新しい仕組みにして、それをまた合わせて道州制にする、そういった仕組みになる危険性が高い。今のところ道州制の本当の姿はあまり見えてないというのが現状でありますけれど、そういった非常に危険性を持っているのが現状であります。特に今もし道州制が行われるなら、基礎自治体として今後小さな自治体の合併、あるいは解消という問題がどんどんこれから各地で再燃してきます。再燃というか強制的に起こってきます。そしてそういった事によって、今ある自治体と住民の皆さんとの関係というのは完全に分断せざるを得なくなってきました。単純にいう効率重視だけで地域づくりができるのか、果たしてそれでいいのかという問題になって、本来の地域自治は成り立たなくなるという、そういったことが懸念されます。一番大事なのは地域に人が住み続けるために私達は何をしなければいけないのか、何をすべきなのか、またどうすべきなのか、そういったものをしっかり見据えて対応していく、それが必要だと思います。是非、今日も新聞にしっかり出ておりますので、見ていただいて勉強をしていただきたいと思います。このままもし、道州制が導入されれば、日本の国家地域は解体するのではないのかと非常に懸念されます。

昨日も知事を交えて、そんな意見交換がありましたけれど、まだ如何せん不透明な部分がいっぱいあります。そんなようなことが今私達を取り巻く状況でありますけれど、地域づくりに対する私達、皆さん方の役割はいろんなものがあると思います。時代とともに経済がグローバル化して日本の工場がどんどん海外へ出て行って、三位一体の改革という時の小泉総理をはじめ、そういった海外化が進むことによって公共事業が減ってきた。様々な工場が海外へ出て行ったことで、日本の国内経済は鈍化して、雇用の場所を失っている若い人達が正規で働けない、ニート化しているとか、アベノミクスで少し経済は上向きだというものの厳しい状況になると思います。更にもう一つ、一番の大きな問題は私達の住む中山間地域を中心に人口が減少しておる。そういった社会現象による少子高齢化が大きな問題になってきているのも事実であります。特に中山間地域に少子高齢化が進むと何が起きるかということなんですけれど、まず一つは地域で今まである自治の仕組み、自分達で作っていく様々な仕組みが全て崩れている状態であります。農村地帯過疎地帯ですと、例

えば田んぼや作物に使う水路の維持、水路の見回りもできない。あるいは地域のお祭りができない。そして更に地域から店が無くなる、商店が無くなる。そして例えばガソリンスタンドも無くなってくる。そうした様々な生活に密着したものが地域から無くなっていきます。

そうしたことによって私達の住む環境が住めない環境に変わりつつある。それも一つの厳しい現状であります。もう一つ大きな問題、これはそこに人が住まなくなることによって特に手入れが行き届かない山、森林が増加して山林崩壊だとか土砂の流出がどんどん起こってきます。現実にも起こっている地域が沢山あります。水害が発生して山が崩れ、山が崩れると川が荒れて、そして海が荒れる。そうした大きな環境破壊が今まさに日本国内・世界各地で起こっております。日本の国内は非常に深刻であると理解していただいた方がいいと思います。そしてそのためには何が必要なのか、何をしなければいけないかという事をここで皆さん方に考えていただきたいと思います。

水は上流から下流へ流れていく。それが水の流れですけれど、こういった一つの流域単位、どんな流域でも結構です。それぞれの流域が流域単位で地域を作っていく、発展していく。そういった仕組みをしっかりとやっていかなければいけない。そういう時代が来ていると思います。川の上流から中流、そして下流までも一体とした様々な取り組み、その仕掛けになるのが私達、皆さん方、そして住民の皆さん、企業の皆さん全てであります。そうしたことを是非やって頂きたい。そして、一国民として、皆さんがこれから何をするのかを、そういった視点に立って考えていただければ、ありがたいと思います。皆さんは、4月から公務員となり様々な研修、昨日も研修され、そこでいろんなお話があったと思いますが、そこで幾つか皆さんに気をつけてもらいたい点があります。当たり前ですが、私達公務員の仕事というのは、常に住民の皆さんが主役であります。

住民の皆さんが安心して安全な生活を送れる、そのためにお助け、支援するのが私達の仕事です。そして、コンプライアンスという言葉、皆さん十分学んできたと思います。これは、どこの世界に行っても、どこの社会におってもですけれど、法令・条例を重視して、これを守っていく重視していく。そのコンプライアンスは最低限の条件であります。こういったことは企業へ行っても同じです。それを十分、理解熟知した上で、物事を受けるときは、一つの方向だけではなくて、360度あらゆる方向から物事を見て頂きたい。そして、一つをあらゆる可能性から全ての可能性を考える中で、方法を判断していただきたい。そういった総合的な物事を判断するスタンスを常に身につけていただいて、仕事に取り組んでいただく、それが一番大事なことだと思います。そして絶対にやってはいけないことは前例踏襲、過去に例はございませんと、よくおっしゃる方がおりますけれど、それは全くナンセンスなことですし、前例

踏襲、過去に例がなかったら自分達で考えればいい。前例踏襲、過去に例がないという考え方は仕事に対して新しい未来はありません。前例踏襲はコンプライアンス、法令を守ることでなくて、法令を守ることと前例踏襲は全然違うことですので、そこをしっかりと押さえていただきたい。特に、住民の皆さんのお話をよく聞いてあげていただきたい。

聞き上手になっていただきたい。皆さんは説得とかお話をするよりも聞き上手、住民の皆さんのお話を聞いていただきたい。特に、住民の皆さんが役所を訪れるときは殆ど何か用事があって来られる場合です。困ったことだとか相談したいことをいろいろ持って役所を訪れたり、電話をかけたりしてきますので、是非、皆さんはそこをしっかりと含んでいただいて、お話をよくお聞きして、しっかり対応していく。そんな風に常に心がけていただいて、帰りはお疲れ様でしたと声をかけてあげて、気持ちよくお客さん、住民の皆さんに帰っていただく。そんな接客に努めていただきたいと思っております。特に仕事、これもどの企業も同じですが、単独での仕事のプレーは絶対失敗します。そうかと言って、時間をかければいいということではなく、短時間でそれを処理していく。そういった能力を持っていただきたい。報告・連絡・相談、「報・連・相」という言葉をよく聞きますけれど、報告・連絡・相談を徹底して、情報を共有していただく。皆さんで判断できないことばかりだと思えますけれど、そこはチームで素早い判断をして素早い対応をして、また、時間がかかる時にはきちんとその旨をお伝えしてご理解いただく、そういったことを常に心がけていただきたいと思えます。

一生懸命相手のお話をまず聞くということが大前提でありますので、そこはしっかりとやっていただきたいと思えます。仕事に慣れてくると、仕事をやる時、何かをやろうとしたときに、できない理由ばかり先に考えてしまいがちになります。何故できないか、こういうことだからできませんという理由を一生懸命考えるのが、仕事になってしまうと、それは仕事ではなくて、無駄な時間を無駄のために費やしている、無駄な給料をもらっているということになります。従って、常にできない理由を考えるより、どうしたらできるかコンプライアンスを守りながら、どうしたらできるかということに時間をかけ研修していただきたい。そのためには、「報・連・相」、報告・連絡・相談をし、しっかりと取り組んでいただく。そういうふうに取り組むことによって、皆さん方、毎朝起きて「よし、今日も頑張って役所に仕事に行くぞ。」とそういう気持ちで仕事に出かけていただければと思います。朝起きて、「ああ嫌だな。今日も行くの、嫌だな。」と思って仕事に出るより、朝起きたとき気持ちよく「よし頑張って行くぞ」と、そこで、また元気よく挨拶をする。そして挨拶が返ってくる。そういった気持ち良さも、皆さんからは是非、発信していただきたい。これはお願いであります。

ここまで当たり前のことで恐縮ですけど、これから私達がどんな地域を作っていくのか、地域づくりという表現がいいかどうか地域づくりの戦略、どんな地域を作っていくのか、どんな皆さんの考えがあり、働いていって欲しいかということをし少し話し合っ欲しいと思います。

一番大事なのは、どこに軸足をおいて地域づくりをしていくか、そういった戦略を立てることが一番大事だと思います。

特に民間の方達は、そういったことに非常に敏感で早くて、結果を出すのも非常に早いです。一つの例で考えるとあまりいい話ではなく恐縮ですけど、トイレ・便所の話をしたときに、私達が小さい頃はトイレがまだ「ぼットン式」といって、汲み取り便所、皆さん方は知らないと思うけれど、それが当たり前でした。それから和式の水洗が入ってきて、今は洋式便所で、便座に座って、更にはウォシュレットが付いて、非常に快適になってきた。TOTOのウォシュレットというのは、正しくこの地域づくり戦略そのもの、地域づくり戦略で学ぶべきものだと思います。

まず、ユーザーや市場の皆さんがどういう事をしてもらったら喜ぶかということを考えて、それをスタートとして物事を発信する。それが民間の商品開発です。それがたまたま、このTOTOのウォシュレットというのは、正しくそのものだと私は思っているんですけど、私達、公務員もそういった視点に立って物事を考えて、実行していただきたい。そういう気持ちを常に忘れないでいただきたいと思います。そして地域づくりは商品開発と全く同じ考えです。ただし、忘れてはいけないこと。これは我々政治家の首長、あるいは役場の人は特に熟知しておかなければいかんと思うんですけど、行政は地域づくり戦略の政策の継続性を長い目で見て、地域づくりの戦略をつくっていかねばいけないということ。例えば、3年、4年で目指す方向がどんどんぐるぐる変わっていった場合は、その地域は良くなりませんので、そのことに気をつけ長い目で見据えて戦略を立てていく、そういう必要があると思います。皆さん、それぞれ地域の特性をしっかりと分析してやっていただきたい。そして、自分達の周りで今何を必要としているのか、住民の皆さんは何を求めているのか、そのためには何があるのか、それをどう組み立てていけばいいのか。そういったことをしっかりと考えてやっていただきたいと思います。一貫した長い目の長期戦略で進めていただいて、あとそうなったときにどういった手法、方法をとれるのかというのが、時代時代の流れ、あるいは周りの環境によってどんどん変更になっていきます。

長い地域づくりの視野の中で、あとは様々な手法を取り入れて、その目標へ向かっていく。そんな地域づくりを取り組んでいただきたいと思います。

先ほど紹介しましたように、私どもは愛知県で一番高い山が茶臼山、1,415メートルで、そこを源流として一級河川・矢作川があるという話をしました。矢作川は全長が118キロメートルの比較的短い川でありま

すけれど、それが愛知県の三河湾へ流れ出るのでありまして、それが流域面積約 1,800 平方キロメートル位。結構大きな面積ですよ。さっき 1,900 平方キロメートルというと香川県とか大阪府の面積に匹敵すると言いましたけれど、大体それくらいの流域面積を持つ川であります。そして特に私どもの根羽から水が流れて、お隣の岐阜県も一部通って愛知県豊田市、安城市とか碧南市を通って三河湾につながっています。そこに明治用水土地改良区という利水組合が安城市にあるわけでございますけれど、その明治用水土地改良区というのは安城市の付近というのは元々、水が全く無く、その供給体制もなく非常に大変な土地だったそうです。それで水路を引いてくる。そういった大きな構想で明治時代に水路を引いて、水が大地を潤した。そのことによって日本のデンマークと呼ばれるようになり、学校の教科書にも載りました。その用水水路を開拓したのが明治用水土地改良区でございます。農業用水、工業用水で現在農地は約 5,800 ヘクタール位、水路延長は 393 キロメートル、相当膨大な長い水路を管理していますけれど、その明治用水土地改良区は地域の生命の源である矢作川、ここから私達、明治用水土地改良区を利用する下流の皆さんが、この水の恩恵を預かるだけでなく、特にこの水が上流から来ている上流の森林があるから山があるからこそ、水が守られて作られてくるという考え、「水を使う者は自ら水を作れ」という思想を持って取り組んでこられました。これが大正 3 年であります。1914 年大正 3 年という、今から 100 年前の時の明治用水の為政者が水を使うところが、自ら水を作り、環境を考えて上流の根羽村に 427 ヘクタールの水源林を購入して、植林して 100 年間延々とその活動を続けておられる。そのことが大変素晴らしいことでありまして、今の時代、環境問題が騒がれておりますけれど、100 年前にこの環境問題に気づいて、そして取り組んだという、この明治用水土地改良区の偉業は正しく、これからの地域づくりの礎、基本となるころだと思えます。時の政治といえますか、この時の明治用水の開削をした人、都築弥厚とか岡本兵松、伊豫田与八郎という、その 3 名の方が、今は神様となって、神社に祭られておるということで、神様として奉るくらい非常にすごい偉業であると、そういったことを下流の皆さん方が 100 年前から取り組んでいただいた。何が素晴らしいのかと分析したときに、先ほどから話してきた地域づくりの視点から考えた時に、長期的な視野に立って、明治用水の環境づくりを行っている流域全体を見据えて地域を作ってきたその最たる所以だと思えます。

まず何が必要かと考えたときに、生きるための水が絶対必要だったわけです。明治用水土地改良区は、そして、そのためにどうしようかと考えたときに矢作川から水路を開削しようじゃないか、そして水を引っ張って来ようと考えました。そして、今後どうしていくべきか、それを大正時代に考えたこと、それはこの矢作川の水が未来永劫に亘って、自分達の所へ引っ張って来られるよう、水が流れて来るように源流地の水源

を守っていく必要があるんだということに気づき、更に何に取り組むかというのが、私達上流の森林を水源涵養林として整備していこうじゃないかということで、山を持って木を植えて、自然の整備環境を重んじている。そんな非常に長期的視野に立った地域づくりの素晴らしい例だと思います。

私達はこういった長い視点でもって、地域づくりを進めていく必要があると思っております。ここで若干、根羽村での地域づくりの戦略という形でお話を変えたいと思います。皆さん方の資料に添付されておるかと思いますが、根羽村では地域づくり戦略の一番上の表がありますので、そこを見て頂きたいと思います。根羽村では地域で安心して住み続けたいと、ここ重要ですよ。そうした形で地域づくりをしていきます。そのためにはまず、大部分は根羽村に住みたくなくて、何かに挑戦してみたい、何かをやってみたいと思う、そういった状況を多くの人に呼びかけて、村で安心して長く暮らしていける環境整備が必要とされているんだよという気づきをした。そのために何をするか、そのためには、まず魅力のある、特色のある、そしてオンリーワンである地域を作ろうじゃないか、それが大事なことなんだという位置づけです。そして、そのためには、まずは地域に人が住み続けたい環境づくりが絶対必要になります。これは住環境ですので、道路ですとか上下水道、様々なインフラ整備です。もう一つは働く場所、所得、お金がとれる仕組みや、機会が絶対必要になります。所得の向上が絶対大切になります。もう一つは郷土愛、自分達の住む地域を自分達が好きにならなければ、自分達の地域が好きじゃないと、そこに住むだけでは意味がない。そこに住んで自分達の地域を好きになって地域を作っていく、それが一番大事な部分でありまして、そのためには様々なお祭りだったり、公民館活動があったり、自治会活動があったりすると思いますけれど、そういった部分にも積極的に皆さんが関わっていただきたいと思います。そのためには根羽村の地域づくりはどういった具体的な手法で取り入れていくのか、それを考えたときには、一つは多くの皆さんに応援団、仲間になって頂いて、一緒になって地域づくりをしていただいた。そういった取り組みであります。一つは矢作川の上下流の、私どもの流域には安城市という市がございます。姉妹都市提携はしていませんが、100年前から明治時用水の取り組みの関係で、様々な市民レベルの交流をしています。矢作川の下流にある安城市の野外教育施設が根羽村にあり、そこへ中学生が野外研修に訪れるなど、様々な上下流の交流を取り組んでいるところであります。更に企業の皆さんと私どもの自治体が連携する取り組みもしています。

私どもは矢作川流域の豊田市がお隣であります。豊田市は、ご存知のように自動車の町です。そこには、いろんな企業がございます。アイシングループ、アイシン精機、元々はミッションの会社でありますけれ

ど、そのアイシンググループの皆さんと連携し、根羽村の村づくり、特に森林整備環境づくりに対して企業から支援、お金を出していただいて、それを地域づくりに私達は役立てさせていただきました。更に私どもとアイシンググループさんとは様々な面で連携して、社員の皆さんや子供さんが根羽村へ来て、環境教育をやっているとかそういった取り組みをしております、企業と地域自治体で一体となった地域づくりも熱心に取り組んでいます。また豊田市が本拠地の名古屋グランパスエイトとの交流も熱心に盛んでありまして、元々名古屋グランパスエイトとの交流も私が当時、振興課長をしておる時代に前の村長と一緒に、臨機応変に一生懸命取り組んで動いていたわけですが、そのときに豊田市が合併するとすぐ隣が豊田市なので、そんなようなご縁もあるので、是非、豊田市を本拠地とする、名古屋グランパスエイトに根羽村を何とか売り込んでもらおうじゃないかということで、根羽村は今ネバーランドという地域素材を使った第3セクターの会社も持っております、そのヨーグルトですとか商品を持って名古屋グランパスエイトへ乗り込んで行ったわけですが、矢作川の上流の小さな根羽村ですが、是非、名古屋グランパスエイトさんの力を借りて、根羽村をPRして、平成17年にそういった取り組みのお話をしたのがきっかけで、今ではトヨタスタジアムでホーム試合の時に根羽村から名古屋グランパスエイトの売店を出させて頂いて、ネバーランドが出店したりとか、根羽の小中学生全員が一番最後の試合の時に無料で招待していただいて、名古屋グランパスエイトの方へ、そういったような交流がなされております。そして子供達もやはり根羽にいるからこそ、名古屋グランパスエイトのイベントとか試合を見られる、根羽村に住んでいたから、そういうことが出来たと子供達の心の中に収めていただきたい。その子供達が将来地域を担う子供達に育てていただきたい、そんな希望もあります。

企業との連携あるいは住民との交流連携は、安城市の皆さんはじめ矢作川流域の皆さんとの取り組みが盛んに行なわれているところであります。また、知識ですとか数値で、きちんと検証していく必要があります。そのためには大学とかそういった頭脳との連携も必要になってきます。私どもは森林作り、地域づくりに今信州大学とか岐阜にある岐阜女子大学などと事業連携をする中でいろんな取り組みを進めています。私どもにある素材をしっかりと見ていただいて、そこへ学生さんに来ていただいて、研究分析していただいたり、今は特に信州大学とは森林を中心にやっておりますけれど、最終的にはバイオマスエネルギーを燃料として車を走らせる。それを何とか作りたいとやっておりますけれど、それができるかどうかは別としまして、いろんな面で大学と連携し、そういった頭脳も自治体に取り込んでいく、そんな取り組みになると思います。

また、都市部メディアとの連携というのも非常に重要になりまして、これから皆さん手法、是非、覚えておいていただきたいのですが、通常

例えば、何かをしたいときにお金を出して広告打てばいいやということになりますが、根羽村では広告というのを一切やめようじゃないかと、大変お金がかかるから、その代わりいろんな形でメディアの皆さんにブレインになっていただいて、記事を書いていただく、あるいは仲間としてお客さんを連れて来ていただくじゃないかという、そんな取り組みもしてございまして、そうした様々な取り組みもありますので、是非、こういった面も一つの手法として勉強していただければと思います。

また、子供の環境学習というのも非常に大事な部分で、これは地域の子供も当然ですけれど、下流の子供達との取り組み、それも地域づくりには非常に重要になってきます。私達の地域を守っていく、作っていくには自分達の地域だけでは難しい部分がありますので、流域の子供達、次世代を担う子供達に森林の大切さ、川の大切さ、水の大切さを理解していただく、そんな取り組みも積極的に取り組んでいる地域で、通常の授業、環境授業の一環で子供達が朝8時に安城の学校へ来て弁当を持って、根羽へ来て、弁当を食べて、山へ行って、夕方4時くらいには安城の学校へ帰って行く。そんなような環境教育にも取り組んでいるところであります。こういった中で、まずは地域それぞれの一つの行政単位が一体になることで雇用を伴って、そこでお金が循環して、そして地域のいろんなサービス、福祉もありますし、医療もありますし、学校もあります。地域のサービスの循環ができる仕組みがきちんと構築できれば、これからの時代の流れで人が住み続けられることが可能となっていくと思います。地域の経済循環をその地域で支えていく、そして更にその地域の経済を流域全体で支えていく。その流域全体の仕組みをもっと大きな仕組みで支えていく、そういった仕組みができれば、道州制という問題がきても、それぞれの地域は、地域に人が生き残っていけると思いますが、この仕組みがないと明らかに面的に大きくなるだけで、私達の生活そのものは壊滅していきますので、この人が支える地域に全てが循環する雇用やお金、サービスが循環する仕組みを小さくても大きくても、必ず作って、それを組み合わせていく。そんな取り組みをお願いしていきたいと思います。

あと時間わずかになってきましたけれど、もう一つ根羽村での取り組みを紹介したいと思います。根羽村は林野率92パーセント、そして人工林、人間が植えた木は73パーセントになります。スギ、ヒノキを中心に山作りをしてきているところでありまして、古くから林業が盛んな村でありました。昭和35年に木材輸入の自由化がされ、さらに今、TPP問題が大きく叫ばれております。TPPが実施されるとどんなことが起こるかというのは、既に昭和35年の木材自由化で大きな例がありますけれど、木材の関税が撤廃されて外材が入ってきました。

昭和 39 年には、完全に自由化されて、その後、木材価格は低迷して、林業、山での生活が成り立たなくなっているのが、現状であります。その中で根羽村では地域にある資源は何かと言われたときには、92 パーセントの山が最大の資源であります。山ではいろいろな恩恵を受けてきたこととなりますので、それも産業として何とでも仕組みを作っていきたい。それも取り組んできた事例であります。特に根羽村の林業でいろいろな大きな流れがありますけれど、4つのポイントがあります。まず一つは、これは全国に例がないというわけですが、根羽村の全村民が山を持っている、全村民が森林所有者であるということ。村の村有林を貸して自己所有という形で 5.5 ヘクタールずつ経営しておるところもありますけれど、全員が森林所有者であります。そして森林組合が根羽村単独であるということですので、森林組合員イコール根羽村民であるということでもあります。従って、林業に対する村人の声も理解いただける、そういった地域背景があります。もう一つ、大正 3 年に明治用水土地改良区が根羽村に水源涵養林 427 ヘクタール作って頂いてその後、矢作川の上下流提携が積極的に進んできた地域であります。流域提携が 100 年前から進んでいる地域、そして大正 11 年ですけれど、村有林約 1,300 ヘクタールを官行造林に、国と分収林契約を結んで、昭和 32 年から伐採に入っていた時に、木を切った時に、立木売り払い収入が村の予算の 35 パーセントを占めた、今では全く考えられないことですが、今地方交付税が根羽村では約 50 パーセントを占めております。それが一番大きな部分であります。当時は、自主財源として立木売り払い収入が 35 パーセントを占めるということで、どれだけ大きな財源だったかということが理解いただけるかと思えます。そうした形で村の財政を潤しておったということでございます。

また平成 7 年になって、村内には製材工場が 7 軒あったわけですが、それが様々な経済状況により閉鎖されて、唯一、一軒残った製材工場もこれで閉鎖することになったときに、村から製材工場がなくなるとは産業が衰退してなくなってしまうということで、これは何としても残さなければということで村が製材工場を買いました。これは森林組合イコール村民ということで可能となりましたが、そんな形で製材工場を買ったわけでありまして。森林資源を生かした地域づくりという表がありますけれど、ここで何を言わんとするか、いわゆるこういった仕組みづくりをしっかりとしていきたい。そうして、こういう仕組みづくりのお手伝いをすることが、今日の皆さんに求められていることであり、全ての施策において、こういった仕組みづくりというのは絶対的に必要になってきます。

その仕組みづくりを是非、積極的に進めていただきたい。小さな森林組合、小さな村で、木に付加価値、今まで丸太を出しておったのですが、それを製材して住宅用材として付加価値をつけて販売していく。そのことによって林業をもう一度、「業」として復活させたいと、その取り組

みをしました。そのために何をしなければいけないのか、如何にして売って行くかが大事だと思います。そのためには、私どもだけではできませんので、設計事務所、工務店さんなどが私達の仲間になって、ブレインとなって、特に設計事務所、工務店さんが私達の事業パートナー、お互いに役割分担して、お互いがウイン・ウインの関係を保ちながら、これからの仕組みを作ってきた。これが根羽村の林業が成功した一番の理由だと思います。これから議論を進めていく上でもこういった部分には、皆さん方に知恵を絞っていただいて頑張っていただければと思います。

地域づくりは、いろんな形で人づくり、まずは人づくりが大切だと思います。そして人づくりをすることによって多くの仲間ができて、そして多くの応援団ができてくると思います。地域づくりは地域内のみではなくて、例えば、流域全体そしてもっと大きな面、いろんな面で広めていって頂いて、お互い十分に理解していただく中で、地域づくりを行っていくことが大切だと思います。人を好きになっていただくこと、自分達の住む地域を好きになること、そういう未来を担う次世代の子供達も育てていくこと、それが一番私達にとって重要なこととなります。

この4月にフレッシュな皆さんが職員になりました。そんなことを肝に命じて、これから頑張っていっていただきたいと思います。今日はもう給料出たかな。4月の給料が出たそうですので、今日は金曜日ですので、飲酒運転は絶対だめですけれど、研修終わったら、たまには仲間であんだり、いろんな意見交流をして頑張っていただくことをご祈念申し上げます。ちょうど時間になりましたので私のお話を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

日 時	平成 25 年 4 月 26 日
場 所	飯田市 飯田消費生活センター
研修名	新規採用職員（前期）研修 飯田会場
講演者	根羽村長 大久保憲一氏
主 催	長野県市町村職員研修センター